# 日本のシチリア島へ
# 能古島をブラッドオレンジの産地にしたい

特集
ブラッドオレンジ
BLOOD ORANGE

久保田勝揮
文：梶原圭三
写真：カワカミカズヨシ

「主人が喋ってくれるか心配なんです」。

遡ること昨年の 6 月 25 日。私は初めての能古島上陸で少し緊張していた。渡船場まで迎えに来てくれた久保田夕夏（ゆうか）さんの車に乗り込み、一路、久保田農園を目指す。潮の香りのする海岸線の道路を抜け、なだらかな坂道を島の北側に向かって登る。その車中で夕夏さんがポツリとつぶやいた一言だった。夕夏さんによると、ご主人は口下手なタイプだそうで、それを気遣っての一言だった。ハッとした私は、私の緊張が伝わったのかもしれないと、明るく振る舞ってその不安を掻き消した。ほどなく、車は久保田農園の敷地に滑り込んだ。かすかな柑橘の香りとともに、収穫が終わって青々とした葉っぱだけが残った甘夏の樹々が優しく迎え入れてくれた。

久保田勝揮（よしき）さん（36 歳）とはこれが初対面。初対面自体珍しい事ではないのだが、これまでの生産者さんと違い、それまでのメールのやり取りは奥様の夕夏さんとやってきた。というのも勝揮さんはパソコンやスマホを全く見ないためメールそのものを使っていないのだ。つまり、勝揮さんの情報は全くゼロでの初対面であった。それが私を緊張させたもう一つの理由でもあった。

長身の勝揮さんと小柄な夕夏さんと私の 3 人は農園に隣接する、のこのしまアイランドパーク内にある「レストラン防人（さきもり）」でランチをしながら話す事にした。レストランから見える博多湾の景色の良さと美味しいランチに、場の雰囲気も和み、勝揮さんは、エキゾチックな風貌ながらも朴訥なおもむきで一言、一言、丁寧に語り始めた。久保田農園の歴史、就農の経緯、ブラッドオレンジへのこだわりや地域への想いなど、少しずつ言葉が紡がれていった。

## 移住と開墾

戦後間もない頃、北野町（現久留米市北野町）で農業を行っていた勝揮さんの祖父、勝（まさる）さんは能古島に移住してきた。博多湾にポッカリと浮かぶ瓢箪のような形をした能古島は、対岸の福岡市までおよそ 2km の距離で、周囲約 12km の小さな島である。（今ではフェリーにて約 10 分で行くことができる。）島全体が小高い丘のようになっており、最も高い所でも標高 195m。しかしながら平地は少ない。加えて当時の能古島には耕作地はほとんどなく、まさにゼロからの開墾であった。今のように重機が充実しているわけではない。鍬一本での開墾である。その困難さと苦労に想いを馳せると、改めて当時の人たちの逞しさには尊敬の念を抱かざるを得ない。ちなみに、のこのしまアイランドパーク創業者の久保田耕作氏とは親戚関係にあり、ほぼ同じ時期に北野町から能古島に移住。共に開墾に汗を流したそうだ。

勝さんは移住当初、一般的な野菜を生産していた。ところが出荷時期に風雨の影響で福岡市内へ向かう船が数日出航できないことが当時はよくあった。こうなると、積み込む予定だった野菜は日持ちしないため廃棄せざるを得なくなる。苦労して作った野菜が廃棄されるのを見ると忍びないだけでなく生活そのものが成り立たなくなる。そう思った勝さんは、野菜を諦め、さつま芋を作る事にした。さつま芋であれば、日持ちもするし輸送にも耐えられる。ちなみに、のこのしまアイランドパークができる前がさつま芋畑だったことは良く知られた話である。その後、さつま芋同様に日持ちし輸送にも適した上に、島の特徴である風通りの良さ、水はけの良さなどを活かした作物として甘夏や温州みかんなどの柑橘類の栽培に移行していった。今では能古島の特産物といえば甘夏やニューサマーオレンジといった柑橘類が中心である。

## ブラッドオレンジとの出会い

そもそもブラッドオレンジは地中海のシチリア島が原産と言われ、今でもヨーロッパやアメリカからの輸入がほとんどである。国産は極めて希少価値が高い。

今を遡る事およそ 40 年前、祖父の勝さんがマーコットというオレンジの一種を接ぎ木していた際にマーコットの穂木が足りなくなった。そこで付き合いのある苗木屋からたまたま「面白い苗木があるばい」と言われ、もらったのがブラッドオレンジだった。これを接ぎ木してみたところ、数年後無事ブラッドオレンジが実った。しかしながら、血のような果肉の赤い色に加え、出来もそれほど良くなかった事から当時はあまり売れなかったそうだ。

これに奮起した勝さんは、試行錯誤を繰り返しながらもブラッドオレンジの栽培に再チャレンジ。おそらく当時国内でブラッドオレンジを栽培していたのは久保田農園だけだったのではないだろうか。誰も教えてくれる人がいない中の孤独なチャレンジであった。祖父、勝さんのそのひたむきなチャレンジを神様は見ていたのであろう。ある日、福岡では有名なフランス菓子のお店から「ブラッドオレンジを使いたい」という依頼が舞い込んだ。これを機に、アイランドパークのイベントとして活用していたみかん狩り用の畑をブラッドオレンジに移行し、タロッコという品種の栽培面積を少しずつ広げていった。

※タロッコは甘みが強くてほどよい酸味もあり、果汁もたっぷり。果肉は柔らかく、オレンジ色から濃い赤色へのグラデーションになる事が多い品種である。

## 少年時代

「やりたい事がなかったけん、いたずらばっかりしよったです」。

2 月のある寒い夜、勝揮（よしき）さんの自宅近くにある行きつけの店で、彼と私は酒を酌み交わしていた。自然薯を料理してくれるその店は、同じ若手の農業仲間とよく行く店らしく、店主とも気心知れた仲のようで、勝揮さんも顔なじみ。その和んだ雰囲気の中で、私が少年時代について聞いた時に出てきた言葉だった。何度か勝揮さんと会ううちに、私は彼のおおらかさに興味を持ち始めていた。

「中学校の時が一番楽しかったですね！校庭の斜面を利用したタイヤ転がしは面白かったですよー。タイヤが勢いつき過ぎて、学校の下にある能古島博物館の屋根にあたって穴が開きそうになりました」。いたずら坊主全開である。

普通であればちょっとした騒動になるくらいのいたずらなのだが、島のゆったりと流れる時間と空気がそれを許容してくれる雰囲気がある。一方で、母親の國枝（くにえ）さんは勝揮さんの子供の頃の思い出をこう語る。「通学途中に蟻の行列を、じーっと見つめているんです。そこから一歩も動かんとですよ」。普通であれば、手を引っ張ってでも学校に連れていく場面だが、國枝さんはそうはせず、じっと見守っていたそうだ。「観察してそれを絵にするのが上手やったけんですね」と。なんとも懐の深い育て方である。島のゆったりと流れる時間と空気、そして親御さんの懐の深い育て方によって勝揮さんのおおらかさは育まれたのだと確信したのだった。

photo: stories and moods, delicious foods world.